



情報の海の泳ぎ方 ～原発事故から学ぶこと～

■ 元村有希子

放射能に汚染された牛乳は沸かせば飲める。正しい？ 間違い？

文部科学省の科学技術政策研究所が10年前、成人の科学リテラシーを計るために使ったクイズの1つである。こんな具合に、日常生活に即した科学的素養を問うクイズを日米欧各国が実施した。共通問題11問の正解率を高い順に並べてみたら、日本は54パーセントで13位、先進国で最低レベル。「受験勉強で得た科学的知識が根付いていない」と分析されている。ちなみに冒頭の問題の正解率は84パーセント(答えは「×」)だった。

今この問題を出したら、正解率は100パーセントに近づくだろう。東日本大震災をきっかけとする福島第一原発の事故は、皮肉なことに学ぶ動機付けを人々に提供している。

放射能と放射線の違い。ベクレルとシーベルトの違い。マイクロとミリの関係。多くの人にとって、3カ月前にはまったく無縁だった世界が今「知らないと自分の安全を脅かす存在」として目の前にある。学ぶことは自分の身を守ることに直結する。

しかし、専門家によって言うことが違うからややこしい。たとえば、一般人が受けていい人工被ばくの線量は年間1ミリシーベルト。ところが福島で学校では「年間20ミリシーベルトまで許容できる」と言う。それでいて、同程度の被ばくが予想される地域の人々には「1カ月以内に避難しなさい」。いったいどうなってるの。誰の言うことが本当なの。そんな気持ちになるのも無理はない。

■ 元村有希子
毎日新聞科学環境部デスク

北九州市生まれ。九州大学教育学部卒業。1989年毎日新聞入社。2001年から科学環境部、現在科学環境部デスク。2006年「第1回日本科学ジャーナリスト大賞」受賞。著書に「理系思考」（毎日新聞社）など。



多くの人はこれまで、専門家が言うことは常に正しく、科学的な事象に関する答えは1つしかないと思っていたはずだ。だが今回、専門家でも常に正しい情報を与えてくれるとは限らないことを学んだ。残念だが仕方がない。放射線の健康影響については「この数字以上は危険」というしきい値がなく、事例も少なければ人体実験もできないのだ。

判断に迷う情報がてんでばらばらに、あちこちから次々と降ってくる。専門用語と数字だらけの情報の海を泳いでいく作法と、状況をバランスよく判断する力が求められる。

本当に必要な情報を選び出すのは難しいけれど、「畳の上の水練」が身につかないように、情報の海の泳ぎ方は実際そこに入ってみておぼれかけたり、水を飲んだりしてみなければ身につかないと思う。

「整理して結論だけ教えて」と言いたくなるが、判断まで他人にゆだねて思考停止するのは危ない。じっさい今回の原発事故の後、「市販のうがい薬を飲めば放射性ヨウ素を除去できる」といったデマがチェーンメールで広がった。不安に襲われ、薬局に走った人もいるだろう。

発信する側が気をつけることは、情報を過度に加工したり規制しないことだ。今回、福島第一原発からの放射性物質の拡散について研究者たちが個別に試みた予測結果の公表を、学会側が「混乱を招くから」と控えるよう呼びかけたという。専門家の責任をはき違えている。人々は今、自ら学び始めている。

